



蝦夷

三万石

仙臺

陸奥

金花山

金花山

見出合文

- 國名
- 御城下
- 名所寺社
- 宿名
- 國境
- 本街道
- 御関所
- 海道
- 西國四國札所



冊 筆 河童成録因縁糸
訂正補圖 自得源内心七春
天保十四年卯五月 御免
安政四年己五月 刻成

對馬

厚

鳴見明

壹岐

厚

唐

筑前

道也

佐賀

肥前

鹿嶋

長崎

島原

肥後

天草

熊本

代

薩摩

大隅

「芸州筆の歴史」出版のお祝い

このたび、財団法人広島文化振興基金の助成を頂き「芸州筆の歴史」を出版されることを心よりお慶び申し上げます。

熊野といえは筆を思い、筆といえは熊野を想う」と言われるように、熊野の筆づくりは約一五〇年の歴史と伝統に根づいた、わが町の個性であります。また、筆は単なる用具ではなく、人の心の動きに応じて、人の心を伝え、人の美意識を表現し、芸術を創造する用具であります。オーバーな表現をすれば、日本個有の美術・工芸のすぐれた作品は、すべて筆がどこかで使われていることは事実であり見逃すことはいきません。

熊野町町民は、こうしたことを、ひとしく誇りとして、この伝統を守ることを深く自覚しているところであります。

このように考えてみますと、「芸州筆の歴史」の出版は町民の誇りの裏付けを資料をもとに明らかにされたことであり、また、筆生産の成立過程や生産発達の経過を資料をもとに明確にされたことであり、その意義はきわめて高いと考えます。さらに、また、出版にかかわられた郷土史研究会の存在とその功績を明らかにしなければなりません。郷土史研究会は

昭和56年9月に発足し、60名の会員を容し、定期的に研究会を実施し、その成果を挙げてこられました。その間、町内の文化財の発掘、発見や保護に尽力されたことは町民の認めるところであります。こうした活動が「芸州筆の歴史」の出版で結晶された功績を高く評価したいと思います。

「芸州筆の歴史」の出版を深く感謝をし、さらに、今後郷土史研究会が筆にかかわるかくれた史実の発掘や、生産の流通機構や、生産技術の発達など研究がすすめられ、熊野町における産業経済の発展に貢献されますことを心から期待をします。

出版のお慶びと研究会の発展を祈念します。

熊野町教育委員会 教育長

光本吉伯

ふるさと熊野

筆道資料の探訪

芸州筆の歴史

熊野町郷土史研究会編

感謝報

謝恩

登里 良太郎

熊野町郷土史研究会初代会長

故 登里 良太郎先生 筆跡

まえがき

安芸郡熊野町は周囲を山にかこまれた小さな村でした。

多くの村人たちは猫のひたいのように狭い田畑を耕作していましたが、とても生計を支えるだけの収入を得ることはできません。

春から秋にかけて遠く奈良や紀州の方に出掛けて行ったので

高野山などへの登山者の荷物を運ぶ仕事や、紀州熊野川流域の立木伐切や木材運搬などに従事していたようです。

秋になり帰国する時、いつ頃からか判りませんが、奈良地方に産する筆や墨を仕入れて帰り、冬の間近国諸方に行商する習慣があったようです。芸備地方史研究（星野英一）

熊野筆についての由来、歴史研究が郷土史研究会の重要な研究課題でした。

この本は昭和六十三年五月から筆道資料の探訪と題して熊野町広報に掲載されたものと研究会で発表したものを収録しました。

佐々木 勝之



くまのほんぐうしゃ
熊野本宮社（熊野権現）

- 所在地 熊野町中溝区字八幡山
- 祭神 伊邪那岐大神・伊邪那美大神

熊野村の村名の由来となったともいわれる神社で、社伝によれば養和元年（1181）ごろ、紀州の熊野本宮社より勧請したと伝えられています。寛政12年（1800）、火繩をくわえた鶴が社殿に飛び込んだため同社は焼失し、神体も中絶したと伝えられ、のち再び紀州より勧請が行われたとの事です。

吉長公（浅野五代藩主）御代記の中に、11月9日（享保4年）討首獄門、場所未詳 安芸郡熊野権現宮守 佐太夫の記録があります。

ふたつと無邪

筆道資料の探訪



作者 故 山 田 満 氏